

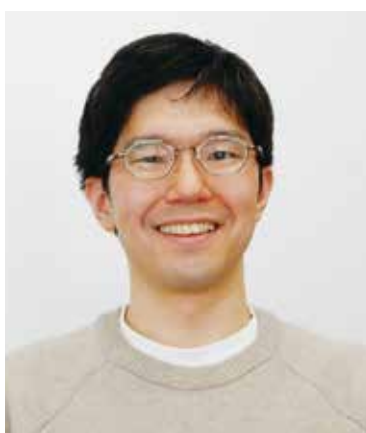
▼ CONTENTS

- 02 響き合う人とデーター 統数研プロジェクト紹介
第45回「若手研究者による『統計・機械学習の今後』に向けた挑戦」
- 06 シンポジウム報告
AI4S 2026「機械学習・統計数理が切り拓くAI for Scienceの新展開」シンポジウムを開催
FORMATH KAGOSHIMA 2026開催報告
「計算技術による学際的統計解析ワークショップ」の開催報告
International Symposium on Advanced Environmental Statistics 2026の開催について
- 08 研究教育活動
2025年度公開講座報告
2025年度「リーディングDAT」プログラムを実施
統計数理セミナー実施報告(2026年2月～3月)
生態学と統計数理の思考院ワークショップ
- 10 統数研トピックス
AgFReM国際インターンシップ開催報告
理数系教員統計・データサイエンス授業力向上研修集会を開催
「大学統計教員育成研修」修了式を開催
木野日織教授が「Acta Materialia & Scripta Materialia Outstanding Reviewer賞」を受賞
元山斉客員教授が公的統計活動支援奨励賞(石橋賞)を受賞
- 12 総合研究大学院大学関係
- 13 共同利用
2026年度統計数理研究所公募型共同利用の採択について
2026年度統計数理研究所公募型人材育成事業の採択について
- 17 外部資金・研究員等の受入れ
受託研究・受託事業等の受入れ
外来研究員の受入れ
- 19 人事
- 20 会議開催報告
令和7年度第4回運営会議の開催
- 21 刊行物
Research Memorandum
研究教育活動報告
Annals of the Institute of Statistical Mathematics
- 22 コラム

大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構
統計数理研究所 ニュース



未来のデータ社会を切り開く 若手研究者たち



▲矢野恵佑准教授

これからのAI・機械学習は科学のために何ができるか

機械学習、特に深層学習の発展は目覚ましく、画像認識やタンパク質構造予測など、多くの分野で人間を凌駕する精度を叩き出している。近年はそうしたAIに関する技術の進歩を背景として、バイオテクノロジー分野や材料科学分野などさまざまな科学研究にAIが活用されている(図1)。「AI for Science」や「AI in Science」と呼ばれるこの取り組みにより、科学的な課題解明の加速や研究の生産性向上への期待が高まっている。

統計数理研究所でも多くの研究者がこのテーマに関心を寄せており、2026年

1月には「機械学習・統計数理が切り拓くAI for Scienceの新展開」をテーマとするシンポジウムを開催したところだ。

だが、AIの急激な進化のスピードは、人間の手法開発スピードを超えつつある。統計基盤数理研究系の矢野恵佑准教授は「統計学や機械学習はもともと科学と協調して進化してきた側面があります。ただ、そこにAIが登場したことで、これらの手法を開発する人たちが、これから進むべき方向を模索し、混迷を極めているのが

現在の状況です」と指摘する。

「われわれ数理の研究者側も、この問題に対し能動的に関わる時期に来ている、というのが私たちの共通した課題意識です」と矢野は話す。

三者三様の切り口で挑むAI・機械学習の課題

矢野とAIや機械学習に関わる課題意識を共有しているのが、包含(つつみ・ふくむ)准教授と奥野彰文准教授だ。



図1: 情報科学分野以外の分野での、AIや機械学習の用語に言及した論文数も増加している(出典: 科学技術振興機構研究開発戦略センター)。

り拓く

統計数理研究所には、日々膨大なデータと格闘し、数理の力で世界の理を解き明かそうとする研究者たちが集う。生成 AI の爆発的な普及により、社会のあり方が劇的に変わろうとしている今、統計学や機械学習の研究現場ではどのような変化が起きているのだろうか。今回は、統数研の次代を担う 3 人の若手研究者に、現在の研究の最前線と自らが描く「統計・機械学習の今後」について話を聞いた。



▲包含准教授

3 人の専門はそれぞれ異なる。矢野は博士課程では統計学や機械学習の理論、つまりデータ解析の手法がどのような数理的性質を有するかといった理論研究をしていた。

転機が訪れたのは、東京大学の助教となった 2017 年。地震学者・測地学者との共同研究をきっかけに、統計学・機械学習の理論を応用の現場へ持ち込むことに興味を湧いた。その思いは、2020 年に統数研に着任した後も現在まで続いている。

「地震学やプラズマ物理学、さらには生態学など、さまざまな応用現場を渡り歩く『流浪の統計学者』になることが私の理想です」と矢野は笑う。流浪の果てに、そ

れらの背後にある共通点を抽出できないかというのが本当の狙いだ。

矢野と同じく統計基盤数理研究系に所属する奥野は「伝統的な統計学と人工知能のちょうど中間に位置する人間です」と自己紹介する。

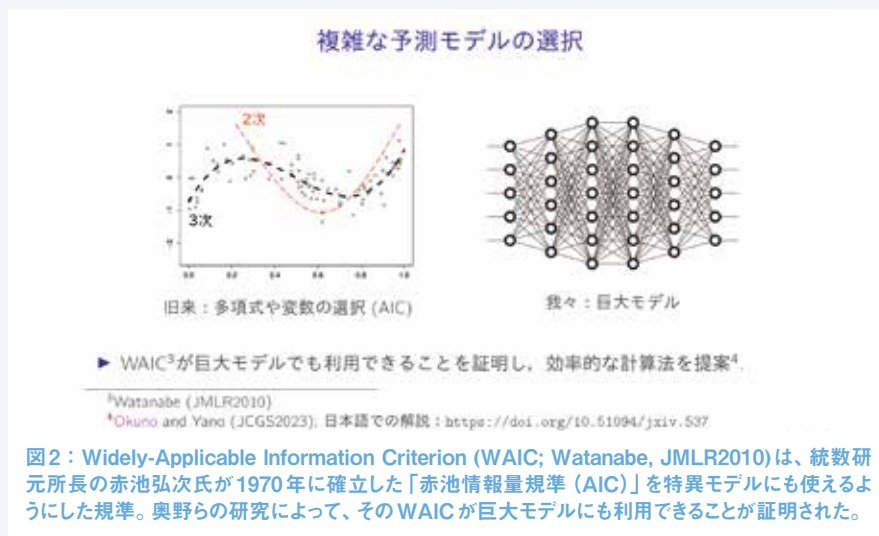
「伝統的な統計学は、データが少なくても、そこに意味のある知見を引き出す（汎化）方法を洗練させてきました。例えば、50 年ほど前から使われている赤池情報量規準（AIC）のようなモデル選択の技術があります」と奥野は続ける。

しかし、これらを現代の非常に複雑で非線形なニューラルネットワークにそのまま適用するのは難しくなっている。「私は、古典



▲奥野彰文准教授

的な知見を現代版にアップデートし、最新のツールを統計学のフレームワークでより使いやすくする研究を進めています」（図 2）。過去の知の遺産を最新技術の土台



として再構築しようというのが、奥野のテーマだ。

一方、先端データサイエンス研究系に所属し、コンピュータサイエンスを専門とする包は「今はビッグデータが簡単に手に入りますが、巨大なモデルに大量のデータを投入すればそれだけですべてが解決する、というわけではありません」と警鐘を鳴らす。

「現在のニューラルネットワークは、古典的な統計モデルが巨大化した“お化け”のようなもので、本質的な性質は変わりません。高速な計算で学習を繰り返すことで精度が上がる反面、人間には判別できないような微小なノイズを加えるだけで予測が狂ってしまう。『敵対的攻撃』に対しては非常に脆い側面があります」と、包は指摘する。この問題は、単なる技術的な欠陥に留まらず、自動運転や医療診断など人の命に関わる分野では、社会実装における大きな障壁となる。

「アルゴリズムが人種や性別に対して偏見を持つ『公平性』に関わる課題も、データを大きくすれば解決する性質のものではありません。むしろ、社会に内在するリスクがそのままモデルに反映されてしまう危険性がある。私は、単に予測性能を上げるだけでなく、どうすればこうした課題を解決し、信頼できるモデルを構築できるかに興味を持っています」(包)。

諸科学を繋ぐ統計数理で「メタ科学」を深化させる

3人が共通して言及するキーワードの一つが、「メタ科学」だ。個別の現象を解析するだけでなく、よいモデルが成立する背

後の法則を科学的に探求する姿勢、すなわち「科学の科学」を意味する。

「前述のように、一見、全く異なる分野であっても、背後にある数理構造には共通性があります。例えば、地震の発生間隔を記述するモデルが、プラズマ物理における粒子の突発的な動きの解析に応用できることが分かってきました」と、矢野はその可能性に言及する。

包は「メタ科学的に考えると面白いことがいろいろあります」と話す。ある現象を予測する統計モデルの当てはまりがよいとき、その背後にある法則とは何なのか。例えば、線形回帰の場合、回帰関数のパラメータに対して予測誤差を対応付けたランドスケープとして表せる。

「機械学習の学習過程の予測誤差の変化を一つのランドスケープとして捉えると、それは『坂道を転がり落ちるボールの動き』のような、力学的な運動方程式と似た構造を持っています。物理学が長年積み上げてきた知見をAIの理解に応用することで、ブラックボックス化しがちな機械学習の内部を解明できる可能性があるのです」と説明する(図3)。

包はこれを「AIを科学のために使う=AI for Science」の逆、つまり「科学の知見

をAIの理解に役立てる=Science for AI」と位置づける。

「私は面白い問題があれば何でもやるというスタンスです」と話す奥野もまた、領域横断的な交流から新たな着想を得ている。「最近ではスーパーコンピュータなど数値解析の専門家や数学の専門家たちとも話をしています。統計学は基本的にどのような分野にも関わることができるので、他の分野の技術を統計学に取り入れたり、逆に統計学のテクニックを他分野に輸出したりすることで、これまで解けなかった問題が解けるようになることもある。その瞬間が非常に面白いですね」(奥野)。

矢野は「統計数理という共通言語を通じて諸科学を俯瞰することで、より深いメカニズムの理解が可能になります。データや結果の信頼性を評価する手法を開発し、未知のデータに対してどの程度当てはまるかを定量化することで、科学的な推論の質を高めていきたい」と展望を語る(図4)。

AI時代の問いの立て方、人間が担うべき「目利き」の力

AIが高度な解決策を瞬時に提示する時代において、研究者自身の役割も変

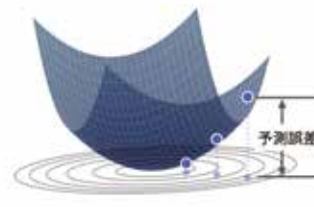
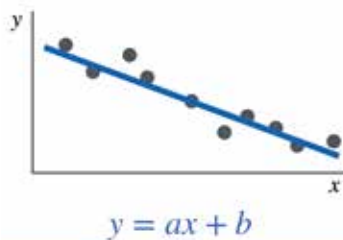


図3：予測誤差を (a,b) の関数として記述し、パラメータを調整して予測誤差の「谷」を下り、関数の最小点を見つける最適化のアプローチ。この動きは「坂道を転げ落ちるボール」の運動と類似する。

化を迫られている。

奥野は今後の研究において「問題を解く能力」よりも「問題を設定する能力」が重要になると考えている。

「AIの推考能力が上がり、解ける問題の範囲が圧倒的に広がりました。これまで人間ができる範囲で問題を立てていましたが、これからは複数の領域にまたがるような巨大な問題を構想し、その推考をAIに任せるといった形にシフトしていくでしょう。最終的に何が面白いのか、どの方向に進むべきかを決めるのは人間であり、その『好み』や『価値観』が研究の個性を生むことになる。自分の研究が、人々を楽しませるものになればいいな、と思います」(奥野)。

次世代の研究者や学生が直面する困難を指摘しつつ、教育の重要性を説くのは包だ。「問題解決が自動化されていく中で、そもそも何が重要な問いなのかを見極める『目利き』の力がこれまで以上に問われます。若い世代にとっては、基礎的な訓練を積みながら、同時にAIが出した答えを検証する力を養わなければならない、非常に難しい時代です。研究だけでなく、こうした教育的な課題に向き合うことも、私たちの世代の役割だと感じています」(包)。

矢野は、統計学や機械学習の魅力をより広い世代に伝えていくことに意欲を見せる。「AIを道具として使うだけでなく、その背後にある数理の哲学や面白さを普及させていきたいですね。社会人へのリカレント教育も含め、統計的な思考を持つことがいかに世界を広げるかを知ってほしい。私自身、海外の研究者との共同研究を通じて異なる価値観を吸収し、常に新しい

ドメインに挑戦し続けることで、自分の糧にしていこうと考えています」(矢野)。

統数研という「知の交差点」がイノベーションを生み出す

3人が口を揃えて強調するのが、統数研という環境のユニークさだ。オフィシャルな組織的プロジェクトや共同研究などだけでなく、日常的な雑談や昼食時の交流から新しい研究が生まれることも少なくないという。

奥野は「統数研では『研究室の位置が近い』というだけで、全く別の専門分野の人と話ができる。学会で発表される研究はある程度形になったものですが、ここではそれ以前の本当に最前線のアイデアが、カジュアルな会話から生まれるのが強みです」と語る。

矢野もこれに同調し、「お互いに異なるツールを持った専門家が、共通の課題に対して『翻訳』を介しながら議論を深めていく。この理想的な環境が、AIという強力な翻訳ツールの登場によって、よりスムー

ズに機能するようになっていきます」と述べる。

また包も「大学のように学部で細分化されすぎず、統計数理という軸で多様な専門家が緩やかに繋がっている。この垣根の低さが、新しい知見の共有を加速させています」と語った。

先人たちが築いてきた統計数理の伝統は、今、AIという新たな翼を得て、若き探求者たちの手でさらに高く、遠くへと羽ばたこうとしている。彼らの挑戦の先には、データが単なる数字の羅列ではなく、世界の真理を映し出す鏡として、より豊かで信頼できる社会を支える未来が待っているに違いない。(広報室)



2026年1月19日に開催したシンポジウム「機械学習・統計数理が切り拓くAI for Scienceの新展開」でのポスターセッションの様子。

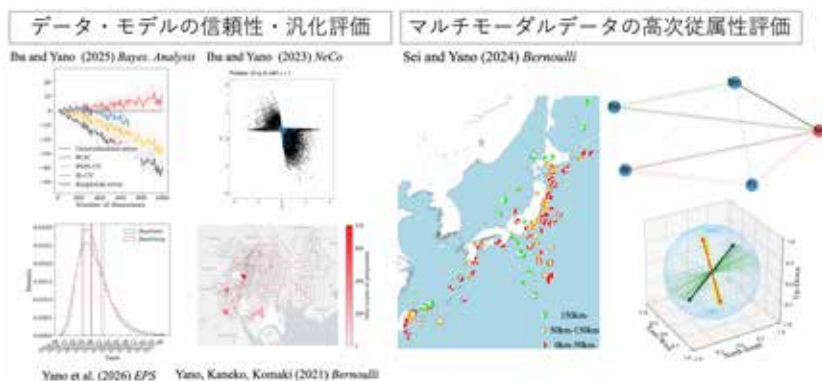


図4：矢野が関連する「AI時代に役立つ統計数理」の2つの例。使用したデータの影響力や学習したモデルの学習外のデータでの性能を探る「データ&モデルの信頼性と汎化評価」。従来の統計解析では難しい混合ドメイン(マルチモーダル)のデータの従属性をデータ駆動的に抽出する「マルチモーダルデータにおける従属性評価」。

AI4S 2026「機械学習・統計数理が切り拓くAI for Scienceの新展開」シンポジウムを開催

2026年1月19日、統計数理研究所はAI4S 2026「機械学習・統計数理が切り拓くAI for Scienceの新展開」シンポジウムを一橋講堂にて主催しました。企画の目的は、機械学習や統計科学の最新動向を紹介し、これらを核としたAI技術による科学研究の未来の変革とAI4Sが切り拓く新しいフロンティアへの道筋の展望でした。

山下所長の開会挨拶の後、文部科学省の淵上孝研究振興局長より来賓挨拶が行われました。講演は、統数研 福水健次教授による「深層生成モデルとそのScienceへの応用」、統数研 矢野恵佑准教授による「諸科学をつなぐ統計数理：AIと諸科学の協調に向けた取り組み」、京都大学 下平英寿教授による「言語モデルの地図：確率分布と情報幾何にもとづく生成AI時代の統計的モデル評価基盤」と続き、午後の部では、核融合科学研究所 横山雅之教授による「統計数理核融合の創成と展開」、統数研マテリアルズインフォマティクス研究推進センター長 吉田亮副所長による「シミュレーションから現実世界へー AI駆動型材料研究の新展開」、国立遺伝学研究所 黒川顕副所長による「ゲノム言語モデルが切り拓くAI for Science：観測から制御へ」、株式会社 NexaScience 代表取締役 牛久祥孝氏による「Embodied

AI for Science」、国立情報学研究所 黒橋禎夫所長による「AI時代の学術基盤：データから知識へ」、最後に文部科学省 研究振興局 阿部陽一 参事官 (情報担当) による「AI4Sに向けた日本の科学技術政策」と続きました。また、第二部ではポスター発表も行われ多くの参加者が議論を重ね歓談していました。

閉会の挨拶は情報・システム研究機構 喜連川優 機構長が務めました。本シンポジウムは現地開催のみで行われ、301名という多数の来場者を迎えて大変盛況でした。

(URAステーション)



FORMATH KAGOSHIMA 2026開催報告

2026年2月15日・16日に、国際シンポジウム「FORMATH KAGOSHIMA 2026」が鹿児島大学にて開催されました。本シンポジウムは、FORMATH研究学会主催、鹿児島大学農学部、リスク解析戦略研究センター、日本森林計画学会の共催で実施され、オーストリア、カナダ、チェコ、インドネ



シア、日本、韓国、フィリピン、台湾の8か国から計33名が参加しました。初日は、森林の樹高成長や成長モデルに関する研究を中心に、ポスター発表を含め様々な報告が行われました。また、リモートセンシング技術やAI技術の応用、森林管理を扱ったゲームの紹介など多様な発表がありました。2日目には、最適化モデルによる伐採計画の最適化やAI技術の応用による画像の自動判別などの研究発表がありました。各研究発表に伴う活発な議論を通して参加者同士が知見を共有し合い、最終的には今後のFORMATHイベントへの期待を語り合う場となりました。なお、当日の運営は鹿児島大学の寺岡教授、加治佐准教授およびその研究室学生が中心となって行われ、研究発表の進行や質疑応答の調整など、多岐にわたる業務を遂行し、シンポジウムの成功に貢献しました。

(吉本 敦)

「計算技術による学際的統計解析ワークショップ」の開催報告

本ワークショップは統計学に関連する計算技術に焦点を当て、関連諸分野の研究者・学生による異分野交流を目的として、2026年2月16日・17日に統計数理研究所にて開催されました。対面では合計47名が参加し、加えて25名のオンライン参加登録がありました。

当日は、統計学に関連する計算技術を専門とする研究者による招待講演が5件行われ、高性能計算・非線形表現学習・量子計算・暗号理論・準乱数といった多様なテーマについて、普段接点の少ない分野間で活発な議論が交わされました。また、統計的機械学習理論および数値解析・

最適化に関連する学生招待講演2件、ポスター講演15件も実施され、若手研究者・学生の発表と交流の機会にもなりました。希望者を対象に、統計数理研究所の計算機展示室の見学も行いました。

本ワークショップは日本学術振興会科学研究費助成事業(25K03087)および統計数理研究所リスク解析戦略研究センター(データ駆動型リスク解析のための計算数理プロジェクト)の補助を受けており、詳細は<https://okuno.net/events/ISACT2026>に掲載されています。

(奥野 彰文)



International Symposium on Advanced Environmental Statistics 2026の開催について

2026年3月24日(火)、International Symposium on Advanced Environmental Statistics 2026を統計数理研究所において開催いたしました。当日は海外の招待講演者6名、国内の招待講演者4名による講演が行われました。

広範囲の環境課題への課題解決に向けた計科学的手法の発表があり、これによりさらなる本分野への統計科学の貢献の国際的な連携が進展したと思われます。

(金藤 浩司)



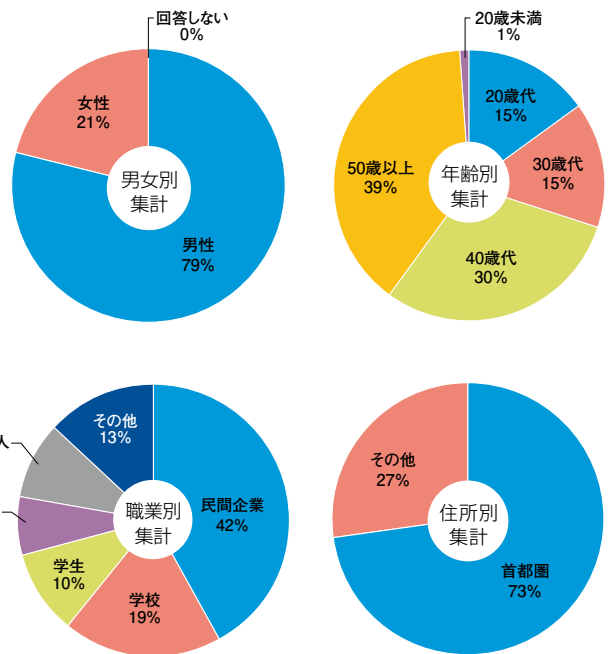
2025年度公開講座報告

2025年度の公開講座は、有料講座として一般講座4講座（対面3講座、オンライン1講座）、リーディングDAT講座3講座（全てオンライン）、無料講座として2講座（全てオンライン）を開催しました。

	講座名	開催期間	延時間	受講者
一般講座	社会人のための統計学再入門:基礎理論の理解とEZRによるデータ解析	6/27(金)	5.5時間	55
	自然を回復軌道に乗せる(nature positive)生物多様性科学を支える統計数理	7/23(水)	5時間	33
	多変量解析法	8/19(火)~22(金)	20時間	12
	科学哲学からの統計学再入門	10/30(木)	5時間	37
リーディングDAT講座	現代統計学の基礎	10/9(木)~10(金)	10.5時間	28
	統計モデリング入門	12/8(月)~9(火)	13時間	20
	時空間統計モデル:基礎から最近の発展まで	2/6(金)	6時間	50
無料リーディングDAT講座	不連続分布のベイズ計算:Sticky・境界条件・Mirror-PDMP	1/14(水)	1.5時間	33
	作用素スケーリングと組合せ最適化	3/27(金)	2時間	11

有料講座の全受講者を、住所別、年齢別、職業別、男女別に集計し結果をグラフにまとめました。本講座は、職業上・研究上必要な専門的知識をより向上させることや具体的な問題を解決する実践的な学習内容を提供する講座として開講しているため、様々な職種の方にご参加いただいています。また、受講者の年齢には大きな偏りがなく、全ての年齢層に受け入れられていることもわかります。オンライン開催に伴う影響なのか首都圏のみならず、宮城、福島、新潟、石川、長野、静岡、愛知、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、岡山、山口、徳島、香川、愛媛、高知、福岡、長崎、熊本、大分、鹿児島、沖縄から参加していただきました。

最後に、各講義を担当された講師の方々から心から感謝いたします。
(情報資源室)



2025年度「リーディングDAT」プログラムを実施

現代社会で必要とされる統計数理の知識とスキルを持ったデータサイエンティストの育成を目的としたプログラム「リーディングDAT」の9年目となる2025年度は、3つの有料講座「L-A. 現代統計学の基礎」(10月9日-10日)、「L-B. 統計モデリング入門」(12月8日-9日)、「L-S. 時空間統計モデル:基礎から最近の発展まで」(2月6日)をオンライン講座として開催しました。

録画された講義の配信、講師によるライブでの質疑応答、配信後講義動画のオンデマンド配信を組み合わせで行われ、どの講座も受講生からは質問が多数寄せられ、大変活発な講座となりました。

また、以前から2021年度リーディングDAT L-A 講座(4日間)の前半2日間分、および、関連して作成された補助動



L-Sオンラインでの講義の様子

画を無料で公開していますが、2017年度L-B1講座の一部を追加公開しました。リーディングDAT無料講座は「L-X. 不連続分布のベイズ計算: Sticky・境界条件・Mirror-PDMP」(1月14日)、「L-Y. 作用素スケリングと組合せ最適化」(3月27日)を配信しました。

統計思考院では今後もオンライン講座の実施を積極的に

行うと共に、対面での開催の可能性も探りつつ、社会のニーズに応える企画を進めていきます。

受講者数(有料講座:受講登録者数、無料講座:出席者)

L-A	L-B	L-S	L-X	L-Y
28名	20名	50名	33名	11名

(統計思考院)

統計数理セミナー実施報告(2026年2月~3月)

毎週水曜16時から所内研究教育職員および外部の方が1人40分ずつ、1日に2人の講演を行っています。2026年2月~3月のセミナーは下記の通り行われました。

日程	氏名	タイトル
2026年 2月 4日	田中 未来	距離データと方向データからの位置情報の復元
2月18日	松井 茂之	Designing early-phase screening trials for robust decisions under operational flexibility
2月25日	清水 信夫	連続変数とカテゴリ変数が含まれるデータ集合の主成分分析
3月 4日	吉本 敦	災害拡散過程を対象とした距離依存型分散カーネルの最適森林ランドスケープ管理への適用
3月 4日	金藤 浩司	環境モニタリング調査における課題に対して
3月11日	小山 慎介	Coarse-grained Hawkes processes
3月18日	瀧澤 由美	統計数理の発展と実社会への貢献 — 時変量の時空間解析と通信方式の国際標準化 —

セミナーの開催予定はホームページにてご案内しています。 <https://www.ism.ac.jp/>

(メディア開発室)

生態学と統計数理の思考院ワークショップ

統計思考院人材育成ワークショップ7001「生態学における理論・統計・シミュレーションの活用と実践」を9月3-5日、京都で行いました。全国から37名の大学院生が集まりました。20代の大学院生の育成には15-20年上の世代が適していると考え、本ワークショップは、門脇浩明氏(京大)、辰巳晋一氏(京大)、立木祐也氏(都立大)に企画も実践もお願いしたところ、微分方程式の解の安定性をゲームを通して体得するなど、様々なスタイルのワークショップが実施されました。

また、7003「生物多様性と群集動態: 定量化の数理と統計的推定法」の3回目を、11月4-6日、長野県菅平高原にて合宿形式で行いました。大学院生を中心に全国から39名が集まりました。大学院生にも話題提供してもらい、同世代での質疑や意見交換も活発に行われました。

両ワークショップを通して、計算だけでなく背景にある数学の基礎を大切に、現場の生き物を意識した統計数理思考など、統数研の文化も充満する3日間でした。

(高谷 健一郎)



写真提供: 門脇浩明

AgFReM国際インターンシップ開催報告

2026年2月12日・13日の2日間にわたり、統計数理研究所にて、リスク解析戦略センター主催のAgFReMリサーチコンソーシアムによる国際インターンシップが開催されました。参加者は、インドネシア、フィリピン、韓国、チェコ、オーストリア、日本から15名（国外研究者11名）でした。このコンソーシアムは、アジア諸国における「持続可能な農林資源管理」の実現を目指し、共同研究の推進と次世代研究者の育成を目的として設立された国際的な研究ネットワークです。本インターンシップでは、機械学習モデルを用いた気候リスク脆弱性評価、リモートセンシングにより観測された攪乱後林分における微気候変化の解析、さらに干ばつの環境影響を把握するための機械学習とリモートセンシングの統合的活用手法の紹介など、気候変動を主題とした研究を含め、多様な研究発表が行われました。また、各国の研究者・学生がそれぞれの地域特性や背景を踏まえて最新の技術や知見を共有

し、共同研究の可能性についても具体的な議論が展開されました。これにより、今後の国際共同研究の深化や新たな研究課題の創出に向けた方向性が明確になり、分野横断的な視点から課題解決を模索する有意義な交流の機会となりました。（吉本 敦）



理数系教員統計・データサイエンス授業力向上研修集会を開催

2026年2月21日～22日、佐賀大学本庄キャンパスにおいて「理数系教員統計・データサイエンス授業力向上研修集会」が、佐賀大学、全国統計教育推進協議会、JDSSP高等学校データサイエンス教育研究会の主催、統計数理研究所、統計関連学会連合統計教育推進委員会等の共催により実施されました。生成AI社会の進展を背景に、統計・データサイエンス教育と探究型学習の高度化をテーマとして、BI・AIツールを活用した探究学習のハンズオン、産業・医療分野におけるデータ活用事例、大学におけるデータサイエンス教育改革、地域DXやEBPMの取組などを取り上げ、高校・大学・行政・産業界の関係者が集い、教育実践や制度設計について議論しました。各セッションでは予定時間を超えるほど活発な質疑が続き、会場は終始大きな熱気に包まれました。参加者は2日間延べ200名を超え、開催地を中心に、大学教員・研究者、高校教員、教育委員会・行政関係者、企業関係者など全国から幅広い参加がありま

した。近年、大学・高専機能強化支援事業による成長分野人材育成の推進に加え、高校教育改革においてもSSH、DXハイスクール、さらに約3,000億円規模の基金を伴うN-E.X.T.ハイスクール構想などの政策が進められており、本研修会は理数・情報・データサイエンス教育を軸とした高大接続型人材育成の課題と実践を共有する重要な機会となりました。（立正大学 渡辺 美智子）



「大学統計教員育成研修」修了式を開催

2年間にわたる「第3期 大学統計教員育成研修」は、「統計エキスパート人材育成プロジェクト」の最終年度となる2026年3月に終了し、3月13日（金）に修了式が開催されました。

修了式では、14名の修了生に「修了証」と「履修証明書」が授与されました。また、特に優秀な成績を上げた2名の修了生に統計数理研究所「所長賞」が、研修成果を活かして社会に貢献した1名の修了生に「研修部特別賞」が、それぞれ授与されました。

修了式には、統計数理研究所の関係教員（17名）、文部科学省の担当職員（6名）、修了生所属大学等の担当教員（10名）が参加し、統計数理研究所の山下智志所長から式

辞が、文部科学省研究振興局学術基盤整備室の土井大輔室長から来賓祝辞が、修了生に贈られました。

これまでの3期にわたる研修により、合計38名の若手研究者が、大学院修士課程の統計教員の育成を目的とする研修を修了しました。修了生は、4月以降、統計エキスパート人材育成コンソーシアムの「特別会員」、統計数理研究所の「客員教員」として、所属する全国の大学等で統計エキスパートの育成に貢献していく予定です。

なお、統計学教員等の高度な統計人材を育成する文部科学省の補助事業は、2026年度からも5年間実施される予定です。

（大学統計教員育成センター）



大学統計教員育成研修 修了式 令和8年3月13日

木野日織教授が「Acta Materialia & Scripta Materialia Outstanding Reviewer賞」を受賞

木野日織教授が材料科学分野の国際的トップジャーナルであるActa MaterialiaおよびScripta MaterialiaのOutstanding Reviewerを受賞しました。本分野における専門的知見に基づき、質の高い査読を多数行い、論文の学術的完成度向上および研究水準の維持・発展に継続的に貢献してきた点が評価されました。本賞は、年間を通じて特に優れた査読活動を行った研究者を対象に、各誌の編集委員会が選定する表彰制度です。査読の質、建設的な助言、迅速かつ誠実な対応などが総合的に評価されます。

（広報室）



元山斉客員教授が公的統計活動支援奨励賞(石橋賞)を受賞

元山斉客員教授が公的統計活動支援奨励賞(石橋賞)を受賞しました。公的統計活動支援奨励賞(石橋賞)は、公的統計の作成や利活用、これに関連する分野において顕著な貢献があった研究者を顕彰および奨励し、公的統計の発達や利活用の促進に寄与することを目的として、設けられたものです。

授賞理由：総務省における家計統計・物価指数の改善、財務省の法人企業統計調査の改善のほか厚生労働省・国土交通省の統計調査の品質改善などへの貢献は極めて大きなものがあります。

よってここにその功績を称え表彰するとともに、今後の一層の活躍を期待します。(広報室)



総合研究大学院大学関係

入学者選抜試験結果

【5年一貫制博士課程】 実施無し

【博士後期課程】

試験年月日	合格者数	
2026年1月20日(火)	2026年 4月入学(第2回)	1名
	2026年10月入学(第1回)	0名

統計科学コース学生研究発表会について

2026年2月5日(木)、2月6日(金)、統計科学コース学生研究発表会(2025年度第2回)を大会議室にて開催しました。

発表時間は1人あたり20分で統計科学コースの学生が研究成果を発表しました。会場参加者から多数質問が寄せられ、活発な質疑応答が行われました。

統計数理研究所優秀学生賞表彰式

2025年度の統計数理研究所優秀学生賞受賞者は下記のとおり決定しました。

三戸 圭史さん(博士課程(3年次編入学)、5年)
本間 翔太さん(博士課程(3年次編入学)、5年)

表彰式は2026年3月11日(水)会議室2(D208)において行われ、山下所長より受賞者に表彰状と金一封が授与されました。

コース修了式

統計数理研究所優秀学生賞表彰式から引き続きコース修了式が行われ、4名が本コースを修了しました。



コース修了式。左から、本間さん、書川さん、三戸さん(椎葉さんは欠席)

春季学位記授与式

2026年3月24日(火)に、総合研究大学院大学葉山キャンパスにおいて春季学位記授与式が行われ、本コースから4名が学位記を授与されました。



春季学位記授与式

学位取得者

令和8年3月学位取得者は次のとおりです。

【課程博士】

氏名	論文題目
椎葉 洋之	Real-World Dataを用いた疫学研究における因果推論と多変量解析に関する研究
書川 侑子	BAYESIAN MODELING FRAMEWORK FOR DATA WITH GROUP STRUCTURE VIA VARIABLE FUSION (変数融合に基づくグループ構造を持つデータののためのベイズモデリングの基盤構築)
三戸 圭史	Incorporating Graph Domain Structure into Matrix Representations and Optimal-Transport Kernels (グラフのドメイン情報を取り入れた行列表現と最適輸送カーネル)
本間 翔太	生物の空間分布を形成するプロセスに着目した統計モデリング

春季入学式

令和8年4月7日(火)に総合研究大学院大学葉山キャンパスにおいて、秋季入学式が行われ、本コースに4名が入学しました。

(総務企画課総務企画係)

共同利用

2026年度統計数理研究所公募型共同利用の採択について

本研究所の2026年度公募型共同利用の申請課題が、2026年3月3日(火)開催の共同利用委員会、2026年3月18日(水)開催の国際共同研究集会等審査会を経て採択されました。

採択された研究課題は、以下のとおりであり、その内訳は、共同利用登録が14件、一般研究1が16件、一般研究2が38件、重点型研究が30件、共同研究集会が15件、国際共同研究集会が1件、合計114件です。

【分野分類】

●主要研究分野分類

- 1 統計数学分野
- 2 情報科学分野
- 3 生物科学分野
- 4 物理科学分野
- 5 工学分野
- 6 人文科学分野
- 7 社会科学分野
- 8 環境科学分野
- 9 その他

【共同利用登録】

分野	研究課題名	研究代表者(所属)
3	細胞幾何学モデル	本多 久夫(神戸大学・客員教授)
9	臨床試験における外部情報を活用した試験デザインと解析手法の構築	大東 智洋(東京理科大学・助教)
8	高解像度モデルを用いた沿岸生態系への気候変動影響評価シミュレーション	阿部 博哉(国立環境研究所・研究員)
8	海氷海洋結合モデルを用いた極域気候変動に関する研究開発	小野 純(国立極地研究所・特任教員)
8	北極海全域を対象とする短期海氷予測システムの構築	丹羽 淑博(国立極地研究所・特任研究員)
3	超並列量子化学計算によるタンパク質電子波動関数の精密推定	平野 敏行(東京都立産業技術高等専門学校・准教授)

分野	研究課題名	研究代表者(所属)
3	データ同化手法を用いた細胞核の中央化の解析	木村 暁(国立遺伝学研究所・教授)
3	ノンパラメトリックベイズ法を利用した未観測交絡因子存在下での治療効果推定手法の開発	折原 隼一郎(東京医科大学・講師)
9	制限付き平均生存時間の推定における疑似値を用いた共変量調整法の改良	地引 涼真(東京理科大学・大学院生)
7	金融市場におけるトランプ関税の影響:マルチフラクタル解析による分析	高石 哲弥(広島経済大学・教授)
8	気候モデル等を用いた高解像度数値実験の再現性評価に関する研究	小室 芳樹(海洋研究開発機構・グループリーダー)
2	地方都市バス交通網を対象としたEVバスの分散充電スケジュールと災害時蓄電利用の検討	高木 蒼依(茨城大学・大学院生)
1	処置効果の推定における頑健法の開発	原田 和治(東京医科大学・講師)
7	教育コンテキストにおける非構造化データおよび学習者インタラクションの統合的モデリング	丸山 雅貴(日本国際学園大学・助教)

【一般研究1】

分野	研究課題名	研究代表者(所属)
1	複雑従属性データに対する推測理論と計算手法の研究	増田 弘毅(東京大学・教授)
4	エミュレーションベース極域電離圏モデルのためのデータ同化システムの開発	中野 慎也(統計数理研究所・教授)
8	湖沼・沿岸域の水環境に及ぼす気候変動影響予測におけるデータ同化・アンサンブル予測技術の構築	入江 政安(大阪大学・教授)
3	拡張アンサンブル法により解明する神経変性疾患原因物質の形成および阻害機構	奥村 久士(分子科学研究所・准教授)
1	諸分野における経時データ解析	船渡川 伊久子(統計数理研究所・准教授)
2	シングモイド型逆リンク関数の学習	山崎 遼也(一橋大学・講師)
5	津波および気候変動下の高潮シミュレーションによる沿岸部の浸水リスク評価	北野 利一(名古屋工業大学・教授)
4	X線多波回折を用いた新しい屈折コントラスト撮影法の研究開発	石綿 元(統計数理研究所・外来研究員)
1	マルチモデルアンサンブルを用いた中期確率予測における新たな混合手法の適用と評価	高谷 祐平(気象庁気象研究所・主任研究官)
6	言語、教育、統計のインタフェース	石川 慎一郎(神戸大学・教授)
7	公共空間の利用に対する近隣住民の受容に対する調査研究	堂免 隆浩(一橋大学・教授)
1	AG-curveを用いた最適クラスター数の決定に関する研究	高井 勉(統計数理研究所・外来研究員)
6	アカデミック・テキストにおける時制と相の量的分析	石川 有香(名古屋工業大学・教授)
1	Narayana numbers in explicit sufficient invariants for an interacting particle system	伊藤 栄明(統計数理研究所・名誉教授)
4	火星着陸探査に向けた火星環境再現予測モデルの開発	寺田 直樹(東北大学・教授)
7	古代社会の人口動態の推定	土谷 隆(政策研究大学院大学・教授)

【一般研究2】

分野	研究課題名	研究代表者(所属)
4	機械学習的宇宙構造論: 構造形成から銀河進化へ	竹内 努(名古屋大学・准教授)
2	統合オミクスデータのための多変量解析法の開発	宿久 洋(同志社大学・教授)
3	感染症発生動向と病児保育の利用との数理的な関係の解析	江原 朗(広島国際大学・教授)
6	生成AIと統計教育の融合による教育モデルの深化と実践的検証	竹内 光悦(実践女子大学・教授)
1	文系大学の統計教育におけるソフトウェア利用の問題点	中村 永友(札幌学院大学・教授)
1	SITARモデルによる成長曲線解析法の拡張	南 美穂子(統計数理研究所・客員教授)
2	出生コホートデータを用いたアレルギーマーチの同時軌跡解析:フェノタイプ同定と複数統計モデルによる比較	國吉 保孝(国際医療福祉大学・教授)
6	大規模言語意識調査の継続・展開とオープンデータ化に向けた試み	田中 ゆかり(日本大学・教授)
3	GABA抑制性ニューロン活動に伴う呼吸リズムの安定性と動的遷移構造の解明	尾家 慶彦(兵庫医科大学・助教)
1	モデル選択規準の不偏性と漸近的性質	柳原 宏和(大阪公立大学・特任教授)
2	統計的アプローチに基づく数理アルゴリズムのチューニングと最適化	照井 章(筑波大学・准教授)
1	空間制約付きクラスタリングにおける選択後推論	梅津 佑太(長崎大学・准教授)
8	北極圏における環境中水銀の動態に関する研究	中澤 暦(富山県立大学・准教授)
3	クローナル植物集団におけるジェネット発達過程の定量的評価の検討	荒木 希和子(滋賀県立大学・講師)
5	極大降水量の非定常性と極値生起の重畳に関するデータ解析手法	北野 利一(名古屋工業大学・教授)
5	治水計画に現在用いられる水文頻度解析手法についての新しい提案	北野 利一(名古屋工業大学・教授)
1	統計的一様乱数の生成アルゴリズムの研究	土屋 高宏(城西大学・教授)
1	シリンダー上時系列モデルによる樹木の生長分析に関する研究	井本 智明(静岡県立大学・准教授)

分野	研究課題名	研究代表者(所属)
8	トレイルカメラ動画からの害獣自動判別技術の検討	木島 真志(琉球大学・教授)
3	医療統計分析を駆使したヒトの健康・疾患における亜鉛の病態生理学的役割の解析	藤澤 貴央(東京大学・助教)
1	スパース推定に基づく多変量統計解析手法の開発とその評価に関する研究	川野 秀一(九州大学・教授)
9	数値データを用いた隕石分類手法の開発	新原 隆史(岡山理科大学・准教授)
7	世帯と企業を対象とした大規模データの統合と計量経済分析の新たな可能性	伊藤 伸介(中央大学・教授)
1	統計量分布論における数式処理利活用	中川 重和(岡山理科大学・教授)
5	システム制御における非平滑最適化問題に対するアルゴリズム	豊田 充(長岡技術科学大学・講師)
7	ロバストな統計モデルと機械学習の統合による信用リスク予測手法の高度化	宮本 道子(長崎大学・教授)
2	実践的シンボリックデータ解析環境の開発と応用	南 弘征(北海道大学・教授)
8	避難経路の水害リスクを考慮した避難所選択モデルの構築	富田 哲治(県立広島大学・教授)
2	データ解析コンペを活用したデータ科学教育およびデータ解析環境についての研究	久保田 貴文(多摩大学・教授)
1	空間データ・経時データ・空間パネルデータの分析	力丸 佑紀(北里大学・准教授)
7	アジアの世帯統計マイクロデータによる社会構造の分析	馬場 康維(統計数理研究所・名誉教授)
2	解釈可能な時系列予測用ニューラルネットワークに関する研究	山本 由和(徳島文理大学・教授)
3	ベイズ推定量の応用拡大と実用的アルゴリズムの構築	作村 建紀(法政大学・専任講師)
3	動物行動学・人間科学における数学的手法:数理・統計・シミュレーション	島谷 健一郎(統計数理研究所・准教授)
8	皆伐/間伐データを用いた成長解析手法のアップデート	加茂 憲一(札幌医科大学・准教授)
7	公的統計マイクロデータに対する秘匿措置のさらなる展開	伊藤 伸介(中央大学・教授)
8	流跡線解析への逐次的データ同化手法の適用	鈴木 香寿恵(明治大学・特任准教授)
7	数理的手法を用いたリスク分析	大田 靖(桃山学院大学・教授)

【重点型研究】

重点テーマ1：社会科学におけるデータモデリングの新展開

分野	研究課題名	研究代表者(所属)
6	金融証券市場の高頻度データによる情報環境と価格発見の研究	吉田 靖(東京経済大学・教授)
7	当事者の価値観が背反する状況における合意形成・社会倫理・政策提言	遠藤 薫(学習院大学・名誉教授)
1	新型コロナウイルスワクチン接種における超過死亡への影響分析	濱田 悦生(大阪工業大学・教授)
7	マーケティングシミュレーションのための消費者行動合成データ生成モデル	石垣 司(東北大学・教授)
7	衛星データを用いた経済活動の把握:GDPナウキャストへの応用	浦沢 聡士(神奈川大学・教授)
7	テキストデータを用いた金融時系列予測モデルの構築	森本 孝之(関西学院大学・教授)
7	動的等相関モデルと高頻度金融データに基づく資産価格予測因子の研究	森本 孝之(関西学院大学・教授)
9	財務ビッグデータの統計モデリングと可視化に関する研究	地道 正行(関西学院大学・教授)
7	小売店CRM高度化のための購買状況推定モデルの開発	伴 正隆(筑波大学・准教授)
7	深層状態空間モデルによる多変量時系列モデリングの新展開	佐藤 忠彦(筑波大学・教授)
7	トピックモデルを活用したソーシャルメディア上のユーザーセグメントの捕捉	五十嵐 未来(大阪大学・准教授)
7	中小規模事業者への政策支援効果等に関する基礎的実証分析	後藤 康雄(成城大学・教授)
7	金融市場と電力市場の相乗的発展を達成するリスクマネジメント技術構築	山田 雄二(筑波大学・教授)
7	製品カテゴリー特性尺度日本語版の拡張とスコアの推定	尾崎 幸謙(筑波大学・教授)
7	感性に基づくマーケティングの高度化に関する研究	領家 美奈(筑波大学・准教授)

重点テーマ2：データ解析の妥当性と質を高める生存時間分析法の開発と利用

分野	研究課題名	研究代表者(所属)
3	データの異質性を考慮した統計モデリングと生存時間分析への応用	植木 優夫(長崎大学・教授)
3	機械学習による生存分析手法の検証	樋口 千洋(医薬基盤・健康・栄養研究所・技術補助員)
1	打ち切りを伴う個別生存時間データに基づいた医療経済評価のための統計的基盤構築とその展開	武富 奈菜美(長崎大学・助教)
1	生存時間を評価項目とする統計的因果推論における機械学習の活用	加葉田 大志朗(神戸大学・特命准教授)

重点テーマ3：データ駆動型地盤工学の基盤技術とベンチマークの創出

分野	研究課題名	研究代表者(所属)
5	離散要素法(DEM)解析の自動化基盤構築と地盤工学への応用	松島 亘志(筑波大学・教授)
5	杭基礎支持力評価のための文献ベース・ベンチマーク構築と多モーダルデータ駆動型予測手法の開発	珠玖 隆行(東京都市大学・教授)
5	統計的インフラ劣化モデルにおける推定手続きのサロゲート化と自動化手法の開発	水谷 大二郎(東北大学・准教授)
5	地盤データを対象とした機械学習モデルの機密性リスク検証	大竹 雄(東北大学・准教授)

重点テーマ4：統計数学と代数学の相互作用を俯瞰する

分野	研究課題名	研究代表者(所属)
1	階層型ランダムウォーク・量子ウォークのスペクトル解析	井手 勇介(日本大学・准教授)
1	マルコフ連鎖に現れる表現とその計算	間野 修平(統計数理研究所・教授)
1	漸近的表現論と確率統計モデル	洞 彰人(北海道大学・特任教授)
1	確率分布の正規化に関わる代数的諸問題の解決	清 智也(東京大学・教授)
1	組合せ論的手法と代数的手法による実験計画の構成および統計的最適性の解明	盧 暁南(岐阜大学・准教授)
1	統計数学とデータ解析と代数学	深作 亮也(九州大学・助教)
2	結晶構造データ科学における代数・統計科学	富安 亮子(九州大学・教授)

【共同研究集会】

分野	研究課題名	研究代表者(所属)
4	宇宙地球環境の理解に向けての統計数理的アプローチ	中野 慎也(統計数理研究所・教授)
9	諸科学における統計思考	横山 雅之(核融合科学研究所・教授)
4	データ同化ワークショップ	上野 玄太(統計数理研究所・教授)
1	コピュラ理論の新展開	江村 剛志(広島大学・教授)
2	データ解析環境Rの整備と利用	瓜生 真也(徳島大学・助教)
2	安全なデータ活用を実現するプライバシー保護技術	佐井 至道(岡山商科大学・教授)
7	地域における自殺対策推進のためのワークショップー自殺のマクロ実態とミクロ実態の分析をもとにー	竹島 正(自殺予防と自死遺族支援・調査研究研修センター・代表理事)
5	極値理論の工学への応用	西郷 達彦(山梨大学・准教授)
7	公的統計マイクロデータ活用フォーラム	黒崎 卓(一橋大学・教授/センター主任)
1	無限分解可能過程に関連する諸問題	矢野 孝次(大阪大学・教授)
1	多様体上の統計学:理論と応用の新展開	加藤 昇吾(統計数理研究所・准教授)
3	動物行動の統計・数理モデルと定量的人間科学	島谷 健一郎(統計数理研究所・准教授)
2	最適化:モデリングとアルゴリズム	土谷 隆(政策研究大学院大学・教授)
1	多変量解析と統計的モデル選択の新展開	柳原 宏和(大阪公立大学・特任教授)
2	動的幾何学ソフトウェアGeoGebraの整備と普及	丸山 直昌(統計数理研究所・特命准教授)

【国際共同研究集会】

分野	研究課題名	研究代表者(所属)
1	Information Geometry, Privacy and Monte Carlo	鎌谷 研吾(統計数理研究所・教授)

(総務企画課研究推進係)

2026年度統計数理研究所公募型人材育成事業の採択について

採択された研究課題は、以下のとおりです。

【分野分類】

●主要研究分野分類

- 1 統計数学分野
- 2 情報科学分野
- 3 生物科学分野
- 4 物理学分野
- 5 工学分野
- 6 人文科学分野
- 7 社会科学分野
- 8 環境科学分野
- 9 その他

2026年度統計数理研究所公募型人材育成事業採択課題

【ワークショップ】

分野	研究課題名	研究代表者(所属)
4	データ同化夏の学校	碓氷 典久(気象研究所・主任研究官)
1	統計サマーセミナー	奥野 彰文(統計数理研究所・助教)
1,2,5	連続最適化および関連分野に関する夏季学校	田中 未来(統計数理研究所・准教授)

(総務企画課研究推進係)

外部資金・研究員等の受入れ

受託研究・受託事業等の受入れ

委託者の名称	研究題目	研究期間	研究経費(円)	受入担当研究教育職員
国立大学法人東京大学 総長 藤井 輝夫 代理人 工学系・情報理工学系等 事務部長 渡邊 慎二	インフラ考慮都市発展モデルへの気候変動リスクの組み込み	2023.4.1～ 2026.3.31	0	統計基盤数理研究系 村上 大輔 准教授
株式会社mediVR 代表取締役 原 正彦	経済性エビデンスの二段階検証を通じたSaMDの市場実装を加速させる導入インセンティブモデルの実証研究	2025.11.13～ 2026.3.31	1,300,000	学際統計数理研究系 野間 久史 教授
国立研究開発法人科学技術振興機構 分任研究契約担当者 事業支援部長 大槻 肇	剛性理論と代数統計における同定性問題の解析:組合せ論とアルゴリズム	2025.12.1～ 2026.3.31	1,560,000	統計基盤数理研究系 FIGUEIRA LOURENCO Bruno 准教授

(総務企画課研究推進係)

外来研究員の受入れ

氏名	職名	研究題目	研究期間	受入担当研究教育職員	称号付与
Dan Cheng	Arizona State University, (USA), Associate Professor	確率場の臨界点の解析	2026.2.1～ 2026.2.6	日野 英逸 教授	
豊田 祥史	九州大学 システム情報科学研究院 情報知能工学部門・助教	時系列シミュレータの統計的推論	2026.3.2～ 2026.3.10	福水 健次 教授	
服部 公平	国立天文台・准教授	誤差の大きなデータの活用方法の探究	2026.4.1～ 2027.3.31	日野 英逸 教授	
石橋 英朗	九州工業大学大学院生命体工学研究科・助教	一般化行列式点過程を用いたベイズ最適化	2026.4.1～ 2027.3.31	日野 英逸 教授	

氏名	職名	研究題目	研究期間	受入担当研究教育職員	称号付与
後藤 振一郎	中部大学・准教授	ハミルトン力学系を用いた制約なし凸最適化問題の数値解法の研究	2026.4.1～ 2027.3.31	日野 英逸 教授	
木村 正成	メルボルン大学 数理統計研究科・研究員	集合間の乖離度合いの定量化のための離散ダイバージェンスについて	2026.4.1～ 2027.3.31	日野 英逸 教授	
石綿 元	芝浦工業大学・非常勤講師	X線多波回折を用いた新しい屈折コントラスト撮影法の研究開発	2026.4.1～ 2027.3.31	田中 未来 准教授	
安井 雄一郎	日本経済新聞社・日経イノベーション・ラボ・上級研究員	科学技術文献の引用構造に対するモデル化および指標の構築	2026.4.1～ 2027.3.31	田中 未来 准教授	
中村 淑子	湊運輸倉庫ドローン事業部・データアナリスト	UAV-空撮・レーザ計測技術による森林資源量解析と次世代森林GISの基盤構築	2026.4.1～ 2027.3.31	田中 未来 准教授	
三原 千尋	トヨタ自動車株式会社・主任	ナイーブ予測を基準とした残差学習型時系列予測フレームワークの構築	2026.4.1～ 2027.3.31	中野 慎也 教授	
鈴木 香寿恵	明治大学大学院・特任准教授	流跡線解析への逐次的データ同化手法の適用	2026.4.1～ 2027.3.31	中野 慎也 教授	
丸山 直昌	統計数理研究所・特命准教授	統計学における代数的方法	2026.4.1～ 2027.3.31	間野 修平 教授	特命准教授 称号付与
早水 桃子	早稲田大学理工学術院基幹理工学部応用数理学科・准教授	系統学における組合せ論と統計学の接点	2026.4.1～ 2027.3.31	間野 修平 教授	
有竹 俊光	一橋大学社会科学高等研究院・常勤講師	順序不変な集合表現と最適輸送を用いた行列式点過程のカーネル学習	2026.4.1～ 2027.3.31	日野 英逸 教授	
川島 貴大	ZOZO Research・リサーチサイエンティスト	べき集合上の確率モデルに関する研究	2026.4.1～ 2027.3.31	日野 英逸 教授	
何 協	東京理科大学経営学部経営学科・講師(2026.4～)	大学統計教員育成研修への参画	2026.4.1～ 2027.3.31	川崎 能典 教授	
丸 千尋	中央大学理工学術院・助教	大学統計教員育成研修への参画	2026.4.1～ 2027.3.31	川崎 能典 教授	
山下 雅代	東京学芸大学先端教育人材育成推進機構・准教授	大学統計教員育成研修への参画	2026.4.1～ 2027.3.31	川崎 能典 教授	
小松 尚登	滋賀大学データサイエンス・AIイノベーション研究推進センター・特任講師	大学統計教員育成研修への参画	2026.4.1～ 2027.3.31	川崎 能典 教授	
小谷 久寿	九州大学マス・フォア・インダストリ研究所・助教	大学統計教員育成研修への参画	2026.4.1～ 2027.3.31	川崎 能典 教授	
吹澤 瑞貴	国立極地研究所・特任助教	大学統計教員育成研修への参画	2026.4.1～ 2027.3.31	川崎 能典 教授	
川澄 亮太	群馬大学 数理データ科学教育研究センター・助教	大学統計教員育成研修への参画	2026.4.1～ 2027.3.31	川崎 能典 教授	
大木 有	立正大学データサイエンス学部・助教	大学統計教員育成研修への参画	2026.4.1～ 2027.3.31	川崎 能典 教授	
長田 和樹	東京理科大学 先進工学部・助教	大学統計教員育成研修への参画	2026.4.1～ 2027.3.31	川崎 能典 教授	
李 媛英	名古屋大学大学院医学系研究科 国際保健医療学・公衆衛生学・講師	大学統計教員育成研修への参画	2026.4.1～ 2027.3.31	川崎 能典 教授	
田邊 國士	統計数理研究所・名誉教授	微分幾何学的最適化法および汎帰納推論機械	2026.4.1～ 2027.3.31	日野 英逸 教授	
伊庭 幸人	統計数理研究所・名誉教授、ZEN大学・客員教授(2026.4～)	計算統計の観点からのベイズ統計と頻度論の融合	2026.4.1～ 2027.3.31	矢野 恵佑 准教授	
佐藤 峰斗	日本電気株式会社・研究員	高次元非線形システム向け等価重み粒子フィルタの調整容易化	2026.4.1～ 2027.3.31	中野 慎也 教授	
笹井 健行	トヨタ自動車株式会社・主任	ロバスト推定の収束レートの研究	2026.4.1～ 2027.3.31	藤澤 洋徳 教授	
公文 雅之	明治学院大学・非常勤講師	情報幾何学の基礎研究	2026.4.1～ 2027.3.31	加藤 昇吾 准教授	

氏名	職名	研究題目	研究期間	受入担当研究教育職員	称号付与
馬場 康維	統計数理研究所・名誉教授	アジア各国の公的統計の利用システムと応用	2026.4.1～ 2027.3.31	加藤 昇吾 准教授	
柳本 武美	統計数理研究所・名誉教授	共役解析の再構成とその適用	2026.4.1～ 2027.3.31	加藤 昇吾 准教授	
高井 勉	厚生労働省 社会・援護局・参与	AG-curveを用いた最適クラスター数の決定に関する研究	2026.4.1～ 2027.3.31	加藤 昇吾 准教授	
尾形 良彦	統計数理研究所・名誉教授	大地震の総合的確率予報の研究	2026.4.1～ 2027.3.31	庄 建倉 教授	
村田 泰章	GravTech・代表(個人事業主)	統計数理モデルを用いたGEONET時系列データからの地殻変動異常の早期検出	2026.4.1～ 2027.3.31	庄 建倉 教授	
熊澤 貴雄	元・統計数理研究所特任准教授	地震活動異常の統計解析	2026.4.1～ 2027.3.31	庄 建倉 教授	
瀧 迅	東京農工大学大学院工学研究院・准教授	人間理解に基づく動的健康行動支援システム	2026.4.1～ 2027.3.31	庄 建倉 教授	
村瀬 博典	愛知製鋼株式会社・チーム長	異常検知のメタ学習に関する研究	2026.4.1～ 2027.3.31	福水 健次 教授	
張 文婷	DS施設・特任助教、客員講師(2026.4～)	大学統計教員育成研修への参画	2026.4.1～ 2027.3.31	川崎 能典 教授	
曹 宇舟	南洋理工大学(NTUシンガポール)・博士課程学生	棄却付き分類に関する損失関数設計	2026.4.3～ 2027.4.28	包 含 准教授	
船渡川 隆	中外製薬株式会社	経時データ解析の発展	2026.4.1～ 2027.3.31	山下 智志 教授	
渡辺 元宗	目白大学・名誉教授	線形不等式制約条件の下での推定理論の展開と応用	2026.4.1～ 2027.3.31	矢野 恵佑 准教授	
奥田 悠介	株式会社システムサポート ICT事業部・社員	RadonPy 高分子物性データベースの開発	2026.4.1～ 2027.3.31	吉田 亮 教授	
的場 一樹	株式会社システムサポート ICT事業部・社員	RadonPy 高分子物性データベースの開発	2026.4.1～ 2027.3.31	吉田 亮 教授	
Massimiliano Zamengo	東京科学大学物質理工学院・助教	Xenonpyを用いた高熱伝導ポリマーの開発	2026.4.1～ 2027.3.31	吉田 亮 教授	
中村 理恵	株式会社コーセー 先端技術研究室・グループマネージャー	個人の肌の美しさに寄与する因果関係の探索	2026.4.1～ 2027.3.31	野間 久史 教授	

(総務企画課研究推進係)

人事

令和8年3月30日人事異動(事務職員)

異動内容	氏名	新職名等	旧職名等
辞職	鈴木 修二	独立行政法人国立文化財機構 調査役(併)監査室長	管理部長

令和8年3月31日人事異動(研究教育職員)

異動内容	氏名	新職名等	旧職名等
定年退職	瀧澤 由美	—	学際統計数理研究系准教授

令和8年4月1日人事異動(研究教育職員)

異動内容	氏名	新職名等	旧職名等
採用	赤穂 昭太郎	統計基盤数理研究系教授	産業技術総合研究所人間情報インタラクション研究部門 脳数理研究グループ上級主任研究員
採用	吉田 淳一郎	統計基盤数理研究系助教	—
昇任	林 慶浩	先端データサイエンス研究系マテリアルズ インフォマティクス研究推進センター准教授	先端データサイエンス研究系マテリアルズ インフォマティクス研究推進センター助教
昇任	奥野 彰文	統計基盤数理研究系准教授	統計基盤数理研究系助教

令和8年4月1日人事異動(事務職員)

異動内容	氏名	新職名等	旧職名等
採用	粒来 英雄	管理部長	佐賀大学総務部長
採用	滝坂 大地	管理部総務企画課総務企画係	—
昇任	宮本 照永	管理部総務企画課研究推進係主任	管理部総務企画課総務企画係

令和8年4月1日役職者の異動

異動内容	氏名	職名	任期
兼務命	栗木 哲	統計思考院副院長	令和9年3月31日まで
兼務命	宮里 義彦	運営企画本部評価室長	令和9年3月31日まで
兼務命	宮里 義彦	運営企画本部広報室長	令和9年3月31日まで

外国人研究員(客員)

氏名	現職	所属	職名	研究課題	期間	受入教員
Uschmajew André	Full Professor (W3)	University of Augsburg	客員教授	作用素スケーリングに 対する高速数値解法	2026.3.5～ 2026.3.24	相馬 輔 准教授

(総務企画課人事・給与係)

会議開催報告

令和7年度第4回運営会議の開催

2026年3月13日(金)に、オンライン形式で令和7年度第4回の運営会議が開催されました。

はじめに、研究教育職員の公募人事における選考、助教の再任について協議され、原案どおり承認されました。次いで、各人事案件、研究所の財務状況について、2026年度公募型共同利用について、各種事業等について報告

がありました。

その後、最近の人事異動、財務状況、そして研究所がAI時代においてどのような立ち位置を目指すか等、活発な意見交換が行われました。

(総務企画課総務企画係)



Research Memorandum

No.1229: Fukui, M., Jimichi, M., Saka, C. and Kawasaki, Y., Statistical modeling of firm value based on cash flow
(メディア開発室)



研究教育活動報告

No.59: 統計数理研究所, 総合研究大学院大学 先端学術院統計科学コース, 2025年度 総合研究大学院大学 統計科学
コース 学生研究発表会報告集 (2026.2)
(メディア開発室)



**Annals of the Institute of Statistical Mathematics
Volume 78, Number 2 (April 2026)**

Rebecca M. Lewis, Heather S. Battey and Wen-Xin Zhou
Inference in models with omitted covariates: Cramér-type moderate deviations and applications to high-dimensional regression177

Li-Pang Chen
Variable selection via penalized ridge regression with error-prone variables225

Fang Wan, Wei Liu and Frank Bretz
Exact two-sided confidence sets for a level set in simple linear regression263

Akifumi Okuno and Kohei Hattori
A greedy and optimistic clustering for leveraging individual covariate uncertainty275

Michel Carbon and Thierry Duchesne
Asymptotic normality of multivariate frequency polygons for stationary random fields297

Sudheesh K. Kattumannil, Deepesh Bhati and Isha Dewan
Tests for independence against regression and expectation dependence327

(メディア開発室)



竹林・竹材と資源管理： 数理モデリングの展開

吉本 敦

学際統計数理研究系

私が運営に関わっているAgFReMリサーチコンソーシアムには、昨年度よりフィリピンのBenguet State Univ.が参画している。今年度(2025年度)には同大学との間でMoUも締結し、研究交流がさらに進みつつある。その一環として、昨年11月にBenguet State Univ.で開催されたシンポジウム「Bridging Science, Policy and Practice: A Look at ICFC 2025」に参加した。併せて森林資源管理に関するワークショップも開催し、現地研究者との議論を深める機会を得た。

竹林管理について改めて考えるようになったのは、数年前、台湾の友人から相談を受けたことがきっかけである。彼は竹資源の管理と利用も研究対象としており、竹林管理の最適化について意見を求めてきた。台湾では伝統的にカキ養殖の足場として竹材が利用されており、安定した供給が求められている。しかし、無計画な伐採を続ければ資源は枯渇してしまう。そこで彼は、環境に配慮した“緑の回廊”を形成しながら持続的に竹材を供給する管理方法を模索していた。回廊を設けることで、大面積の皆伐を避け、生態系への影響を抑えたいというのである。話を聞きながら、これまで開発してきたAggregation系の最適化モデルを応用できるのではないかと感じた。しかし、竹林資源を管理するには資源量の把握が不可欠である。友人はLiDAR研究者であったが、竹林の資源量把握やモニタリングは想像以上に難しく、この話はその時点で暗礁に乗り上げ、共同研究として具体化する

るには至らなかった。

そんな折、Benguet State Univ.の友人から、フィリピンで州政府レベルの大規模な竹産業プロジェクトが進められていることを聞いた。台湾のカキ養殖とは異なり、植林による竹林造成から伐採、加工までを含む総合的な竹材産業の構築を目指しているという。フィリピンでは、日本の孟宗竹のように地下茎が長く広がる散生竹ではなく、地下茎が短く株状にまとまって生育する叢生竹(そうせいちく)が主流である(写真1)。そのため、生育や収量は株(clump)単位で評価される。植林後5~6年ほどで、一つの株から数本の竹を伐採して収穫し、残された親竹から新たな竹が再生され、次の伐採につながるという。この植林から伐採、再生へと続くサイクルを見ると、竹という資源のユニークさを改めて感じる。同時に、森林資源管理で取り組んできた間伐最適化モデルが応用できる可能性も見えてきた。伐期が比較的短いため、管理戦略の成果を比較的早く評価できる点も興味深い。

帰路の途中、以前建設された世界で最も高い竹製の像を見学する機会があった。高さ50.23メートルで、ギネス世界記録にも登録されているという(写真2)。竹という資源の可能性を目の当たりにしながら、資源と技術が組み合わせることで新しい産業が生まれ、その背後で効率的な資源管理が実現されれば、SDGsを志向した持続可能な地域社会の形成にもつながるのではないかと感じつつ、来年度の研究構想を練っていた。



写真1：フィリピンの代表的な叢生竹 *kawayan tinik* (カワヤン・ティニック) の株



写真2：竹で作られたギネス世界記録の像 (St. Vincent Ferrer Prayer Park, Bayambang, Pangasinan, Philippines)